
恋する乙女

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する乙女

【ZPDF】

Z0023D

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

大好きな大好きな彼。彼が、もうそろそろ戻ってくる。それが嬉しいくて、思いつきり顔に出て、ちいちゃんに笑われたけど、気はない。だって、彼に会えるんだもの。

「あんた、何すつ」い気持ち悪い顔してんのよ
よひやく、冬も真っ盛りと言つたところで、雪が降り始めた今日この頃。

あまり暖かいとは言えない教室で、メールを読んでいたら、不意にそんな事を言われた。

彼女の名前は、葛原千沙。

まあ、普段はちいちゃんどしか呼んでないけど。

本人はあんまりそれを気に入つてはいないようだけど。

「えへへ、そう、かなあ？」

それは、さておき、思いつきり、だめだしをされてしまった私なわけだけど、そんな言葉も今の私には痛くも痒くもない。

なんと言つても、今の私は絶好調。

たつたいま確認したメールで、超ハッピーなニュースを知ったのだ。

「……あんた寒さで頭いかれた？」

「違うもん。ちょっとハッピーなニュースがあつただけだもん」

そう、あの人が帰つてくる。

ずっとずっと離れ離れになつていたの人。

まるで、ロミオとジュリエット、織姫と彦星のように、離れ離れになつてしまつた私たち。

だけど、ついにあの人が帰つてくるのだ。

これを喜ばないでいられるものか。

「あ、そつ。でも、その顔はいただけないわよ」

「うー」

だけど、田の前に居る彼女は、冷たくあしらつ。

いつもの事とは言え、ちょっと切ない。

でも、まあ、確かに、彼女の言つとおりじょとほしゃざむぎなのかもしけれない。

騒がしいのが好きじゃないあの人にとっては、あんまり喜べるものではないはず。

それに、私は決めたのだ。

あの人には似合う大和撫子風の純和風の淑やかな淑女になると。
軽く顔を揉んで、顔を整える。

「よし、完璧」

そして、最後に鏡でチェックしたらおしまい。

そこには、いつもと変わらない表情の私がいる。

「……変わり身、早いわね。そういうところにだまされるのよね、
男子どもは」

だけど、今度はそれをつっこむ彼女。

失礼だ。

いつでも、あの人には一番の私を見て欲しいから、自然とそう出来る
ようにしただけ。

そもそも、私は、男子をだました覚えなんてこれっぽっちもない。
だいたい、毎日毎日学年問わず告白されてるちいちゃんに言われ
たくない。

学園に降臨した女神様、なんて言ひ異名を男子からもらっているぐ
らいなのだ。

どこの漫画のお姫さまなのかと、小一時間問い合わせやりたい。
ちいちゃんみたいに、綺麗だつたら、きつと、あの人も一発のはず。
やっぱり、神様はすごい。

ちいちゃんは、あれで、勉強も出来て、運動神経もいい。

中学のころにやつてたバスケットでは、全国大会優勝を経験して、
おまけに自分はMVP。

なのに、私は、勉強も運動神経も人並み程度。
全く太刀打ちできやしない。

悔しい。

だけど、不思議とそんな彼女に嫉妬する事はない。

かなわないとと思うと同時に、私にとつての憧れなんだと思う。

まさしく、私の描く理想像だから。

「で、そんだけ、あんたの顔をくわせくわせることもよくな、出来事つてなんなのよ?」

それ以前に、それを見せびらかしたりしないからなかもしれない。ため息混じりにめんどくさそうにそういう彼女には、どこにも媚へつらつたところはない。

それこそが、彼女の魅力なのかもしれないけれど。
きっと、そんな魅力を持つていれば、さすがのあの人もいちじるだと思つ。

「ずっとずっと片思いしてた人が、こっちに戻つてくるんだ」「私がずっとずっとと思い続けてきたあのを振り向かせる事だつて出来るかもしねない。

「つまり、華が小学生のころに会つた憧れの人が、大学卒業と同時にこっちに戻つてくるつてわけね?」

あらかた、説明し終わつたところで、ちいちゃんがかいつまんた経過を言う。

ちなみに華と言つのは、私の名前で、本名は木下華。
「なんて言うか……お疲れ様、つていう感じね」「
で、その後、ため息混じりにそんな事も言われた。
まあ、確かに、そんな感想を言われるのは仕方ない。
私のその六年越しの片思いを知つている人はみんなそう言つし。
でも、そんなに長い片思いになつたのは、仕方ないと言えば仕方ないのだ。

私が初めて会つたのが、小学校五年生の秋の終わり。

あの人気が、高校二年生、ちょうど今の私の年頃のとき。

どう考へても、小学生と高校生に接点なんかないから、思いなんて告げられない。

会つた事だつて偶然だつたし。

友達と映画を見に行つたとき。

子供だけで見に行くのは危ないからと言つて、その友達のお姉さんに一緒に言つてもらつたんだけど、その時に、偶然にあの人と会つた。

そのお姉さんが、あの人とのクラスメイトで、友達と映画を見に来ていたんだけど、ちょうど見る映画も同じだった。

だから、一緒に行動してたんだけど、そのときの表情がすうじく可愛かつた。

動物の感動物の映画だつたんだけど、可愛い仔犬が出てくると、もう目じりを下げる、とろけるような顔をして、いざ、感動シーンに入ると、ぽろぽろと涙をこぼす。

男の人の泣き顔って印象があんまりいい物じゃないのかもしれないけど、あの人気が泣いているところは、妙に愛嬌があって可愛かつた。で、その事を、あの人と別れてから、お姉さんに言つたんだけど……

「あなたの趣味も悪いわね」

ちいちゃんと同じ事を言つた。

そもそも、年上の人には憧れるんだつたら、普通は、かっこよかつたり、頼りになりそつたつたり、男らしさといふ。

それを踏まえたら、涙もろくて、男らしさのかけらも見当たらないあの人には、当てはまるわけがない。

「そんな事ないもん。すっごく可愛かつたんだもん」

だけど、私には、そつちの方が良かつた。

心の底からほつとするような、癒されるようなそんな感じ。

なんだか、ありのままの自分を受け入れてくれそうな、そんな感じがした。

「それに、割と頼りになるんだよ?」

確かに、一見すると頼りなく見えるあの人。

私がいつも見てたあの人との表情は穏やかで、温かみのある感じだった。

だけど、それだけじゃなかつた。

ただただ、可愛いだけの人じゃなかつた。

あつたかくて、優しくて、そして、本当に、強い人だつた。

辛そうにして居る人を見ると、手を差し伸べる、そんな人だつた。

そんなあの人の人間性に私は自然と惹かれていたんだ。

「まあ、いいわ。でも、直接的なつながりはないんでしょう?」

「うう」

と、ここで痛い一発。

彼女の言うとおり、確かに、直接的なつながりはない。

たぶん、あの人にとっては、私は、元クラスメイトの弟の友人。いや、もしかすると、恋人と思われていたかもしれない。

小学五年生となれば、男女の性別の差もなんとなく感じてくるようになる。

そんな状況で一緒に居るんだから、そう思われていた可能性もある。そう考えると、あまりいい状況ではない。

だけど……

「ちゃんと環さんに紹介してもらひうから

ちゃんと約束を取り付けている。

もちろん、環さんと言うのは、さつき言ったお姉さんの事。

「前は小学生だったから、ダメだけど、高校生になった今なら恋愛対象に入るはずだし」

六歳差は大きい。

だけど、高校生と社会人なら、まだ大丈夫。

世間的に見ると、あんまりいい目で見られないかもしだいけど、それでも、十分にまだありえるカップリング。

その年によつやく追いついた。

だから、こうして、こつちに戻つてくれるのは、本当にうれしい。絶対に、彼女にしてもうう。

そのために、ずっと私は、自分を磨いてきたんだから。

まあ、それが、成果に結びついたのかどうかはわかんないけど。でも、ずっと変わらず思い続けてきた気持ちだけは負けないつもりだ。

「ふーん。まあ、それなら、頑張んなさい」

だけど、田の前にいる彼女は、なんだかつまらなさそうに答える。
もしかして、今まで、一度もその事を言わなかつたのをすねてるの
かもしねり。

彼女は、どこか自分の事を、私の保護者みたいに思つてゐる節もあるし。

「うん、ありがと。頑張るね」

でも、これだけは、彼女頼みというわけにもいかない。
環さんに協力はしてもらつてはいるけど、勝負は自分でつける。
じゃないとあの人に対しても失礼だし、それに……
出来る限り、自分自身の力だけで向き合えないようじや、やつぱり
彼にはつりあわないようと思つ。

そのためにも、彼女には悪いけど、今回は自分の力で頑張りたい。

「やあ、久しぶり」

「うい。元気そうだな」

環さんと彼 祐さんは、いかにも親しげと言つた感じで、あいさつを交わしている。

なんだか、ちょっと嫉妬。

そりや、元クラスメイトだから、親しいのは分かるけど、やつぱり、
ちょっと羨ましい。

特に、私なんかは、ずっと遠くで見てるだけだつたし。

もちろん、せつかく紹介してくれてる環さんに失礼だと言つ事ぐら
い、百も承知だけど、やつぱり、ちょっと嫉妬してしまつ。

「で、この子が華」

「木下華です。涼風高校の一年生です」
ぺこりと頭を下げる。

一瞬黒い事を考えてたせいで、慌てかけたけど、こゝはもう慣れ。
祐さんに相応しい女になるために、努力を繰り返してきた。
冷静沈着はお手の物。

「覚えてる? 昔、映画館で一緒になったでしょ」「う?」

「あー、うん、覚えて……」

「ない、でしょう。そのいいかただと、って、華も泣きそつた顔しないの」

けれど、それもあっさり瓦解。

環さんはそういうけど、そんな事言われても無理だ。

こっちは、何年も、本当に何年もずっと祐さんの事がずっと好きで、ずっと見続けてきたのだ。

もう、それは、どこかのストーカーだと言われてもおかしくないほど、見続けてきた。

なのに、覚えてもらっていないなんて、そんなのひどすぎる。

「ごめんな、木下さん」

謝られても、嬉しくない。

ただ覚えて欲しかった。

忘れて欲しくなかつた。

「ホントに覚えてないの?」

「うーん」

もう一度、環さんが振つてくれるけど、彼は難しそうな顔をして考え込む。

たぶん、思い出せてない。
寂しい。

告白する以前の問題だ、これじゃあ。

「とりあえず、最後に映画を見たのは、高2の秋で、小学生と一緒にいたのは、覚えてるんだ。でも、あれって、男だけじゃなかつたか?」

もういいです。

これ以上、傷に塩を塗りこまないでください。
そう言おうとしたところでの彼の言葉の続き。

「いや、確かに、華ちゃんも、って……ああ、そむことかあと、環さんもなんとなく話が読めた感じの顔。

そして、一人だけ分からぬ私。

置いてけぼり？

「ほら、ショートカットで天然でボケボケな子がいたでしょ？」

「ああ、はいはい、いたいた。なんか、質問に対しても返つて来る答
えが、微妙にあってない子だよな？」

「そうそう、その子。その子が、華ちゃん」

「はっ？」

彼の時が止まつた。

そして、それと同時に私の時も止まつた。
二人して完全に止まつた。

「今の華ちゃんから想像したつて、分からぬいだらうけど、あのと
きのいかにも男の子、つて感じで、天然ボケボケな子が、華ちゃん。
分かる？」

そんなふうに環さんは聞くけど、目の前にいる祐さんの顔を見れば
すぐに分かる。

『全く分からぬ』

そんな感じの顔。

「うーん、こりや、ダメだ。仕方ない。ちょっといきなりだけど」
不意にぐいっと環さんが私の肩を抱くと、耳打ちをしてくる。

『告白しちゃいなさい。祐さんのために一生懸命綺麗になりました、
て』

「えええ！？」

それは、無理。

いきなり過ぎて無理。

てか、いきなり告白して、オーケーなんでもらえるわけがない。

「大丈夫。こいつ、今フリー、というか、恋人いた事ないから
いや、それは知ってるんだけど、と言いそうなつたけど、とりあえ
ず、問題はそっちじゃない。

何故、それを知つてると聞かれると、そじらくんは乙女の秘密とし
かいいようがない。

恋する乙女は無敵なんです。

「じゃ、祐、華ちゃんの事よろしくねえ」

なんて、脇道それてる内に、環さんは帰つていいく。

取り残される一人。

なんて言つた……

どうしたものか。

「で、結局、どうなつたわけ？」

「振られちゃつた」

結論から言つと、勢い任せで告白した結果、振られた。

「の割りに嬉しそうだけど？」

「えへへ～、分かるう？」

けれど、出てくる言葉はとろける言葉。

いや、まあ、確かに振られた。

もつ完璧に振られた。

だけど、それだけじゃない。

それだけじゃないから、こんな

「いや、きもいから。ああ、でも、男は、そんな顔の方がいいんだつけ？」

なんとも失礼ない方をされてしまつ顔をしてしまつ。

「むー、ちいちゃんひどいよー。でも、今田は許してあげる」

でも、今の私は絶好調。

今なら、いきなり抜き打ちテストだって言われても、笑顔でやっちやう。

点数は悪いだらうけど。

「で、何がどうなつたの？」

けれど、そんな私と対称的にちいちゃんはイライラ。
どうしたんだろう？

もしかして、あの口だらうか？

「あのね、確かに振られたの」

思い返す、あのときの祐さんの言葉を。

『ありがとう。そこまで思つてくれるのは嬉しいし、正直すっげく
どきどきしてる』

そう言つて照れた顔はすっげく可愛かった。

いやん、もう、きやあああ、みたいな感じ？

こっちが恥ずかしさで壊れちゃいそうなぐらい可愛かった。

『でも、今は、正直、木下さんの気持ちには答えられないんだ。それだけ思つてくれてるんだから、こっちも少しだけ時間が欲しい。今の答えは、ノーだけど、もう少し時間をちょうどいい?しつかりと考えてから、真摯な答えを出したいんだ』

だけど、次に出てきた表情はすっごくかっこよかつた。

もう、大人の男、みたいな感じで、どきどき。

前から素敵だつたけど、しばらく会えない間にさらに素敵になつた。

そこまで、言われたら、仕方ない。

それに、答えはなんとなく、限りなくイエスに近いノー。

だから、待つ。

待てる。

「なんていふか、きもいわねえ」

とりあえず、仕方ないから、端折つて説明したんだけど、それは聞き捨てならない。

「ちいちゃん、ひどいよ……すっげくカッコいいんだからね、しかも可愛いし」

祐さんは可愛いってかつこいいんだ。

「いや、まあ、華がそれだけ惚れるんだから、そんなんだろうけど、私は無理つて話し

うー、なんとも言い返しがたい。

人の好みは、人それぞれだから、仕方ない。

でも、祐さんを貶されるのはいや。

だけど、もし、ちいちゃんが祐さんを好きになつたら……

「うん、分かった、ちこちゃんには、会わせなこと。絶対に会わせないよにするよ」

とりあえず、会わせないでおこづ。

もし、ちこちゃんが祐さんを好きになられたら……

絶対、私じゃ勝てない。

もう、美人で才色兼備なちこちゃんの相手になるわけがない。
だから、会わせないでおこづ。

それにも、祐さん。

早く私の事を好きになってくれないかな？

(後書き)

ずっと前の書きかけの奴を書いたんだけ
うわあ、ひでえ……

ひどすぎて、穴があつたら入りたい。
でも、アップする辺り、救えないなあ　ww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0023d/>

恋する乙女

2011年1月28日04時00分発行